

「西方の人」の運命と美（その一）

高田 瑞穂

「西方の人」が書き終えられたのは、昭和二年七月十日

である。『改造』同年八月号は、六編の創作すなわち、藤

森成吉の「のれん二重」、中里介山の「夢殿」、中河与一の「博とら函とらになる馬車」、里見弴の「善魔」、青山青果の「償金四十万弗」と、その結尾の「西方の人」とを掲載していた。

「わたしはわたしのクリストを描き、雑誌の締切日の迫つた為にペンを抛たなければならなかつた。今は多少の閑のある為にもう一度わたしのクリストを描き加へたいと思つてゐる。」

「続西方の人」第一章「再びこの人を見よ」の一節である。この続編の書き上つたのは、昭和二年七月二十三日、

死の前日であった。芥川龍之介の絶筆である。

「誰もわたしの書いたものなどに、——殊にクリストを描いたものなどに興味を感じるものはないであらう。しかしわたしは四福音書の中にまざまざとわたしに呼びかけてゐるクリストの姿を感じてゐる。わたしのクリストを描き加へるのもわたし自身にはやめることは出来ない。」

先の引用に続く、「再びこの人を見よ」の後半である。

「西方の人」言いかえればクリストが、自らに死を課した芥川の胸奥に最後まで在り続けた映像であつたことは、ここに明らかである。昭和二年九月号の巻頭に「続西方の人」を置いた『改造』は、小穴隆一の描いた「芥川龍之介

の死顔」をも掲げなければならなかった。

「西方の人」「続西方の人」における芥川に、四福音書のクリストは何を、どのように「呼びかけてゐる」かを凝視すること、このことはやがて、芥川その人の運命と美との解明につながるにちがいない。

(一) 「わたしのクリスト」

「わたしは彼は十年ばかり前に芸術的にクリスト教を――殊にカトリック教を愛してゐた。長崎の『日本の聖母の寺』は未だに私の記憶に残つてゐる。かう云ふわたしは北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種をせつせと拾つてゐた鴉に過ぎない。」

「西方の人」は三十七の短章によって構成されているが、その第一章「この人を見よ」は、右の如き回想に始まる。昭和二年から「彼は十年ばかり前」は、大正六年前後、第四次『新思潮』時代であり、芥川の文壇登場期である。したがって芥川が、「彼は十年ばかり前」に回想の起点を置いたということは、自らの作家的生涯の全体を回想したということと変わりはない。思えば、短く、そして長い十年

であった。

周知の通り、大正六年前後は、文壇の主流が耽美派から白樺派に移動した、大正文学の一転機であった。その前後に文壇に登場した若き日の芥川の内には、耽美派的なるものと、白樺派的なるものとの双方が、それぞれの影を落していたとしても何の不審もない。芥川のクリストへの関心が、先ず、耽美派の刺激、殊に「北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種」への共鳴に発したことも、ここに改めて言う必要はあるまい。『邪宗門』（明治四二・三刊）や『南蛮寺門前』（大正三・七刊）などの美的情調が、芥川の感覚の一つの方向を指示したこと、その印象がやがて芥川文学の有力な一分野たる切支丹ものの展開に役立ったことは、芥川自身も再三言及しているところである。ここでは、作中に木下杢太郎の名の出でくる「MENSURA ZOI」(大正六・一『新思潮』)にまず少しく触れておきたい。凝視は、時に余所見を必要とするであろう。

ゾイリアの首府にあるゾイリア大学の教授連が考案して「近代の驚異」と評された価値測定器、それが「MENSURA ZOI」である。一切の価値は、この測定器によって数字となって現前するのである。その話を、「僕は、船の

サルーンのまん中に、テーブルをへだてて、妙な男と向ひあつてゐる」その「妙な男」から告げられる。ゾイリア国民は、早速それを税関に据えつけたという。

「外国から輸入される書物や絵を、一々これにかけて見て、無価値な物は、絶対に輸入を禁止する為です。この頃では、日本、英吉利、独逸、奥太利、仏蘭西、露西亞、伊多利、西班牙、亜米利加、瑞典、諾威などから来る作品が、皆、一度はかけられるさうですが、どうも日本の物は、あまり成績がよくないやうですよ。我々のひいき眼では、日本には相當な作家や画家がいさうに見えますがな。」

そこで「妙な男」は、「楔形文字のやうな」妙な字の行列している新聞ゾイリア日報をとりあげて、「先月日本で發表された小説の価値が、表になつて出ていますぜ。測定技師の記要まで、附いて。」と語る。このあたりはある興味をさそう。

「久米と云ふ男のは、あるでせうか。」

僕は、友だちの事が気になるから、訊いて見た。

「久米ですか。「銀貨」と云ふ小説でせう。ありますよ。」

「どうです。価値は。」

「駄目ですな。何しろこの創作の動機が、人生のくだら

ぬ発見ださうですからな。そしておまけに、早く大人がつて通がりさうなトーンが、作全体を低級な卑しいものにしてゐると書いてあります。」

僕は、不快になつた。

『お気の毒ですな。』角顯は冷笑した。『あなたの「煙管」もありませぬ。』

『何と書いてあります。』

『やつぱり似たやうなものですな。常識以外に何もなさうですよ。』

『へえ、』

『またかうも書いてあります。——この作者早くも濫作をなすか……』

『おやおや。』

僕は、不快なを通り越して、少し莫迦々々しくなつた。『いや、あなた方ばかりでなく、どの作家や画家でも、

測定器にかかつちや、往生です。とてもまやかしは利きませんからな。いくら自分で、自分の作品を賞め上げたつて、現に価値が測定器に現はれるのだから、駄目です。無論、仲間同志のほめ合にしても、やつぱり評価表の事実を、変へる訳には行きませぬ。まあ精々、骨を折つて、実

際価値があるやうなものを書くのですな。』

『しかし、その測定器の評価が、確かだと云ふ事は、どうして、きめるのです。』

『それは、傑作をのせて見れば、わかります。モオパッサンの「女の一生」でも載せて見れば、すぐ針が最高価値を指しますからな。』

『それだけでですか。』

『それだけです。』

僕は、黙つてしまつた。』

長い引用を敢てしたのは、コンピューター時代の先取りという興味は別として、ここに少なくとも二点、新進作家芥川龍之介の内的風景が浮かぶからである。その第一点は、西欧文化の移入に関する日本人の価値判断のあいまいさへの批判ないし自省、第二点は、日本の現文壇における作品の価値判断のあいまいさへの不満ないし自省である。

対象を芸術ないし芸術家に限定して考えると、ここで芥川の内に影を落したものは、究極において、近代日本における美的なるものあいまいさ、換言すれば美学不在にかかわる不安であつたにちがいない。そしてそれは、かつての鷗外の Resignation、漱石の神経衰弱につながりを持つ、

近代日本の知識人に課せられた歴史的宿命であつたとも考えられる。しかし芥川は、そういう深刻な課題を、一つの夢として提示するに止つた。

「気がついて見ると、僕は、書齋のロッキング・チェアに腰をかけて St. John Ervine の The Critics と云ふ脚本を読みながら、昼寝をしてゐたのである。船だと思つたのは、大方椅子の揺れるせゐであらう。

角額は、久米のやうな気もするし、久米でないやうな気もする。これは、未だにわからない。』

これが結びのことばである。この作品の書かれた大正五年十一月の翌十二月「運」(大正六・一『文章世界』)と題する作品が成つたことにも、芥川の胸にあつたもの影が射しているように感じられるが、今はそこまで余他見をすることはやめて、本題に帰る。

「それから何年か前にはクリスト教の為に殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じていた。殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を与へたのである。わたしはやつとこの頃になつて四人の伝記作者のわたしたちに伝へたクリストと云ふ人を愛し出した。クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出来

ない。」

先に引いた冒頭に続く一節である。ここまでで、芥川は、約十年間に体験したクリストへの関心を、三つの段階において提示している。先ず「芸術的にクリスト教を——殊にカトリック教を愛し」、次いで「クリスト教のために殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じ」、最後に、「この頃になつて四人の伝記作者のわたしたちに伝へたクリストと云ふ人を愛し出した」というのである。「煙草と悪魔」(原題「煙草」大正五・一一『新思潮』)から「奉教人の死」(大正七・九『三田文学』)を経て「西方の人」に到る道であった。

「日本に生まれた『わたしのクリスト』は必ずしもガラヤの湖を眺めてゐない。赤あかと実のつた柿の木の下に長崎の入江も見えてゐるのである。従つてわたしは歴史的事実や地理的事実を顧みないであらう。(略)わたしは唯わたしの感じた通りに『わたしのクリスト』を記するのである。厳しい日本のクリスト教徒も売文の徒の書いたクリストだけは恐らくは大目に見てくれるであらう。」

第一章「この人を見よ」の後半部である。これに、先に引いた「続西方の人」の第一章「再びこの人を見よ」を重

ねると、最晩年の芥川の内なる「この人」の存在は自明となる。

「クリストは『萬人の鏡』である。『萬人の鏡』と云ふ意味は萬人のクリストに倣へと云ふのではない。たつた一人のクリストの中に萬人の彼等自身を発見するからである。」

「再びこの人を見よ」の冒頭である。

「西方の人」「続西方の人」を通じて、凝視すべきは、芥川の「わたしのクリスト」であり、「クリストの中に」芥川の発見した「彼自身」であることには、何の疑いもないであろう。私は、正・続兩編全五十九章を勝手に解きほぐし、勝手に結びつけることを通して、そういう「わたしの『西方の人』」を追尋したいと思う。しかし私は、クリストについても、その教義についても、ほとんど知るところがない。ただ私の前に、一冊の『聖書』と、数冊のキリスト伝と、二三の「西方の人」論とがあるだけである。そういう無知を知りつつ、やはり「わたしの『西方の人』」を気ままに追尋したい。いつまで続くか、いつ終わるかは私にも解らない。

(二) 「彼の伝記作者」

「続西方の人」の第二章は、「彼の伝記作者」と題されている。「西方の人」の第一章「この人を見よ」の中に、「四人の伝記作者のわたしちに伝へたクリストと云ふ人を愛し出した」という表現のあることは先に触れた。「四人の伝記作者」とは、マタイ、マルコ（芥川はマコと記している）、ルカ、ヨハネである。この「四人の伝記作者」のうち二人は、いわゆる十二使徒の成員である。マタイは、本名はレビ、ローマの集税官の下役であったが、イエスに従い、選ばれて使徒となった。かれの伝道については聖書中に記されていないが、最初パレスチナで、次いでエチオピア、バルチア、ペルシアに伝道したという。新約の冒頭に置かれた『マタイ福音書』は、紀元八十五年頃に成立したと推定されるキリスト言行録である。マルコは、イエスの死後、十二使徒の頭ペテロにみちびかれて信仰を得、ペテロに随行して、通訳者として働いたという。その筆による『マルコによる福音書』は、四福音書中最も早く、紀元六十五年ごろに成ったとされている。ルカは、医を業とした

南部イタリアの異邦人であったが、パウロの忠実な弟子で、『ルカによる福音書』と『使徒行伝』の著者とされている。前者の成ったのは紀元八十年代と推定されている。

ヨハネは、その兄ヤコブとともに十二使徒の一人である。

「さて、イエスがガリラヤの海を歩いておられると、ふたりの兄弟、すなわち、ペテロと呼ばれたシモンとその兄弟アンデレとが、海に網を打っているのぐらんになった。彼らは漁師であった。イエスは彼らに言われた、『わたしについてきなさい、あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう』。すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。そこから進んで行かれると、ほかのふたりの兄弟、すなわち、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネとが、父ゼベダイと一緒に、舟の中で網を繕っているのぐらんになった。そこで彼らをお招きになると、すぐ舟と父とをおいて、イエスに従って行った。」（『マタイによる福音書』第四章一八～二二）

ペテロやヤコブとともに、イエスの変容と受難とを目撃し、最後の晩餐においてはイエスの胸にもたれたヨハネであった。この『ヨハネによる福音書』の成ったのは、四福音書のうち一番おそい、一世紀の終わり頃と推定されている。

る。

「ヨハネはクリストの伝記作者中、最も彼自身に媚びているものである。野蛮な美しさにかがやいたマタイやマコに比べれば、——いや、巧みにクリストの一生を話してくるルカに比べてさへ、近代に生まれた我々には人工の甘露味を味はさずには措かない。(略)人生に失敗したクリストは独特の色彩を加へない限り、容易に『神の子』となることは出来ない。ヨハネはこの色彩を加へるのに少くとも最も当代には、*up to date* の手段をとつてゐる。ヨハネの傳へたクリストはマコやマタイの傳へたクリストのやうに天才的飛躍を具へてゐない。が、壯嚴にも優しいことは確かである。」

芥川の内を生起した「クリストの一生」のイメージに就いて、まず最も親近感を与えたものは、共観福音書と呼ばれる三書と区別される第四番目の『ヨハネによる福音書』であったにちがいない。同時に、そういう親近感の対極において、畏敬感を与えたものは『マルコによる福音書』であったであろう。

「クリストの一生を傳へるのに何よりも簡古を重んじたマコは恐らく彼の伝記作者中、最もクリストを知つてゐた

であらう。マコの傳へたクリストは現実主義的に生き生きしてゐる。我々はそこにクリストと握手し、クリストを抱き、——更に多少の誇張さへすれば、クリストの髯の匂を感じるであらう。」

マルコにおいて芥川の感得したものは、必ずしも事實的に正当ではない。しかしそこに「簡古」を見たことには誤りはなかつたであらう。それよりも、まず凝視を必要とするのは、次の一句である。

「人生に失敗したクリストは独特の色彩を加へない限り、容易に『神の子』となることは出来ない。」

その意味における「独特の色彩」がヨハネの場合「*up to date* の手段」であつたという指摘も、さらには、章末の「彼をデカダンとした或ロシア人のクリスト」、「クリストを *Leifant* に描いた画家たち」等の問題も、一義的な凝視の対象ではない。この章における最大の問題は、次の二点にあるであらう。クリストは「人生に失敗した」のであるか。クリストは本来「神の子」ではないのか。(未完)